



Title	Immortalityへの道 : ワーズワスとキーツの時間感覚について
Author(s)	斎藤, 隆文
Citation	大阪外大英米研究. 1980, 12, p. 45-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99049
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Immortalityへの道

ワーズワスとキーツの時間感覚について

斎 藤 隆 文

19世紀の詩人達にとっての大きな課題の一つは、この世界における彼らの位置を確認することであったといえよう。それまで宗教が支えてきた個人と世界との間の秩序が、コペルニクスの地動説やニュートンの万有引力の法則をはじめとする種々の科学の発達とともにしだいに崩れてゆき、彼らは今や一人一人が各自の価値観を自ら新しく創造しなければならない立場に追い込まれていたのである。彼らは想像力という新しく手に入れた強力な武器を用い、ダイナミックに積極的に外的世界に働きかけ、新しい感覚やビジョンを生み出すことによって、個人と世界との間に新しい秩序をうちたてようとした。そしてとりわけ、イギリスロマン派の詩人達にとっての大きな関心の一つは、いかに時間というものと取り組み自己と永遠とを調和させるかということ、すなわちいかえれば、それは究極には自己を永遠の中に生かすための戦い、immortality獲得の戦いであった。特にワーズワスやキーツにとって時間は大きな関心事だったのであり、彼らはその創造行為を通じて、ただ無意味に流れ去ってゆく時間に意味を与え、それを克服しようとしたのである。彼らの詩の多くは正にこのような時間との戦いの中から奪いとられた戦利品であり、それらは正しく彼らの不滅性の証といえよう。しかしながらここで問題となるのは、ワーズワスとキーツのimmortalityをめぐる考え方が必ずしも同じではないということであろう。O. E. D.によるとimmortalityとは“exemption from death or annihilation”⁽¹⁾ということであり、この定義からみれば確かに両者とも永遠性にあこがれている点において違いはない。けれども両者の決定的な違いは、そこに到る道程の違いであったように思える。そしてそのことが、両者の詩においてさまざまな相違点を生み出しているような気がする。そこでこの小論においては、ワーズワスとキーツ

の *immortality*に対する考え方とその道程を検討することによって、両詩人の特質を見極めたいと思う。

ワーズワスとキーツは互いに相似た性格を持つ詩人であるといわれている。特にワーズワスを深く尊敬していたキーツは、ワーズワスから多くの事を学んでおり、後にワーズワスを非難したという事実があるにしても、その想像力に対する考え方には本来共通するものがみられるのである。例えば、ワーズワスの想像力の重要な要素である “wise passiveness”⁽²⁾ という考え方は、キーツにおいては “negative capability”⁽³⁾ となっている。“negative capability” とはキーツがシェークスピアの想像力に言及して述べた言葉であるけれども、それは又キーツ自身の詩作態度をもよく反映しているのである。すなわちワーズワスとキーツは共に外界の印象を心をむなしくして受け入れるという点において一致している。さらにワーズワスが詩的想像力に関して書いた「力強い感情の流れの自ずからなる発露」⁽⁴⁾ という言葉は、キーツの「詩は、木の葉が生まれ出るよう自然に生まれるものでなくてはならない」⁽⁵⁾ という言葉と、両者とも自発性を尊重しているという点において一致をみているのである。このように両者の想像力に対する態度に共通したものがみられる一方、時間というものに対しても両者は強い興味を感じていた。特に *immortality*に対する関心は強く、ワーズワスが代表作の一つである “Immortality Ode” を書いた一方で、キーツはこの作品に何度も言及しているのである。又双方の詩に “eternal” “forever” といった単語が散見されることもその事実に対する証左だといえよう。しかしながら、ワーズワスとキーツの間には先に触れたように *immortality*に対する微妙な相違が感じられるように思われる。まずワーズワスの “Immortality Ode” から検討してみたい。

ワーズワスが時間について述べている箇所は非常に多いが、しかし “Ode” は、ワーズワスの時間と *immortality*に対する考え方が整理され、象徴化された形で提出されているという点で最もワーズワスの考え方を反映していると考えられよう。この詩においては、ワーズワスは子供の頃の幻の輝きの喪失を契機として、プラトン的なイメージを取り入れながら人間の一生についての考察をしている。

それを要約すると、「人間の魂は前生から肉体という衣をまとってこの世に生まれ来たり、死ぬと又そこに帰ってゆくのだ。人間がこの世に生きることはすなわち、前生の栄光を次第に忘れてゆくことであり、大人になった時にはついにその栄光は消えてしまう。ただ過去を深い内省を通じて回想することによってのみ、我々は瞬間に時間を超越し、不滅の大海上の光景を眺め、永遠にまき返す波のところを聞くのだ」とワーズワスは歌うのである。この内容はワーズワスが *Prelude* などで繰り返し語っていることを比喩的に表現したものといえる。すなわち過ぎ去った過去から、今も生き生きと内なる眼に映じ、現在に活力を与えてくれる “spots of time” を思い起こすことによって日常の時間の流れから解放され、永遠という相の下で事物を直感することができるということを述べているわけである。ワーズワスはこのように回想という具体的な手段によって時間を超越し、immortality へ至る道を歩んだのである。ところが興味深いことに、キーツはこの “Ode” を熟読し、その考え方を受け入れながらもその immortalityに対する考え方をワーズワスと一線を画している。immortalityに関する言葉の使い方を例にとってみると、キーツは例えば次のような表現をしているのである。

1. Thou wast not born for death, immortal bird!

“Ode to a Nightingale”, 1. 61.

2. . . . one who should take leave

Of pale immortal death.

Hyperion, III, 11. 128-129.

3. . . . but bright-blanchéd

By an immortal sickness which kills not.

The Fall of Hyperion, I, 11. 257-258.

“immortal death” という oxymoron は、おそらくシェークスピアやミルトンの影響を受けているのであろうが、その効果は別としても気になるのは、“immortal” が “death” と共に使われていることである。しかもその死は単なる比喩的な「死」ではなく、“sickness” という言葉とも使用されていることからもわかるように、特に肉体的な死の感覚をともなっているといえるのではないか。すなわちキーツが immortality を語るとき、それは一人の人間の、ある

いは一羽の鳥の肉体的な死とは切り離せないのである。それを示すかのように、弟の死に関して述べている 1818 年 12 月 18 日の手紙の中でキーツは *immortality* のことをこう書いている。

The last days of poor Tom were of the most distressing nature; . . . but his very last was without a pang — I will not enter into any parsonic comments on death I have scarce a doubt of immortality of some nature or other.

ここでもやはり *immortality* は肉体の死との関係においてのみ捉えられているのである。その特徴は、ワーズワスの場合のように、過去、現在、未来に至る時間の流れを永遠として捉えた上での *immortality* ということではなく、むしろ空間的なものであり、おそらく時間の概念を含まないといつてもいいすぎではないであろう。さらに次の例はキーツの *immortality* に対する態度がいかに非時間的な要素を持っているかを示すものである。

The goings on of the world make me dizzy — there you are with Birkbeck — here I am with brown — sometimes I fancy an immense separation, and sometimes, as at present, a direct communication of spirit with you. That will be one of the grandeurs of immortality.

Letters of Keats, (18 Dec., 1818)

又 “Bards of passion and of mirth” では次のように書かれている。

Bards of passion and of mirth,
Ye have left your souls on earth!
Have ye souls in heaven too,
Double-lived in regions new?

“Ode”, 11. 1-4

この詩は詩人達が詩をこの世に残していくために、その魂は地上にも又天上にも生きることになるという一種の *immortality* を歌ったものであるが、ここにおけるすでにこの世にいない詩人達の扱い方には、ほとんど時間の問題に正面から取り組んではいないキーツの姿勢が感じられるのである。

こうみると、ワーズワスがはじめから肉体を衣に過ぎぬとして重視しなかったのに反し、キーツは *immortality*の獲得は肉体の死を超越することが大きな前提条件になると想っていたように思われるのである。そしてそれを超越した時、キーツには死さえ楽しく思えるようになるのだ。

Now more than ever seems it rich to die,
To cease upon the midnight with no pain.

“Ode to a Nightingale”, 11. 55-56.

ここにおいてキーツは肉体の死を克服して魂の不滅を認識するのである。

このようにキーツの *immortality*に対する考え方はワーズワスと大きくその性格を異にしている。ワーズワスの “Ode” では、前世から始まり、この世に生まれ、やがて来生へと旅する魂の行程が概念化されているのに反し、キーツにおいてはそのような概念はなく、 *immortality*は、あくまでも非時間的な枠組の内において、肉体の死に対峙するものとして考えられているのである。

このようにワーズワスとキーツにおいて、*immortality*に対する考え方の相違がみられたのであるが、さらにこの違いは広い意味での両者の時間のとらえ方と密接に関係してくるように思えるのである。以下少し両者の時間観を追ってみたい。ワーズワスは “Ode” において深く内省することにより前世の栄光をみることができると書いているが、ただしかし実際のワーズワスの時間に対する考え方は、決して過去のみに固執したものではない。“Yarrow Revisited” と名づけられた詩はそのことを何よりも物語っていよう。

Past, present, future, all appeared
In harmony united,
Like guests that meet, and some from far,
By cordial love invited.

“Yarrow Revisited”, 11. 29-32.

ワーズワスはなるほど回想というものを実際に重んじはしたが、しかし、それはあくまでも過去、現在、未来と続く永遠の時間の枠組の中での話であるということは重要なことである。ワーズワスは多くの場合、過去を語りつつ未来を思うので

ある。“Lines Composed a Few Miles Above Tintern Abbey”はその典型的な例であろう。ワイ川を5年ぶりに目前に眺めつつ、過去に対する回想と未来に対する希望が、この詩の重要なテーマとなっているからである。

それに反して、キーツの時間に対する考え方はワーズワスと好対照をなしているといつてもいい過ぎではない。時間についてキーツは次のような言及をしている。

For down they [water drops] rush as though they would be free,
And drop like hours into eternity.

“To Charles Cowden Clarke”, 11. 13-14.

キーツは水滴が水に落ち、輪をかけてひろがっていく様子を時間が永遠の中に消えてゆくことにたとえているのである。それは美しいイメージを伝えている一方で、遠くなるにつれてさざ波の振幅が小さくなり、やがては消えてゆくことを暗示しており、キーツの時間の把握範囲も現在を中心として、そこから遠くなるほど弱くなることを思わせる。又次の引用の中では時間が木の葉や砂時計を落ちてゆく砂粒、天使の涙などにたとえられている。

1. The gradual sand that through an hour-glass runs.

“After dark vapours have oppressed our plains”, 1.13.

2. And their minutes buried all

Under the down-trodden pall
Of the leaves of many years.

“Robbin Hood”, 11. 3-5

3. He mourns that day so soon has glided by,

E'en like the passage of an angel's tear
That falls through the clear ether silently.

“To one who has been long in city pent”, 11. 12-14.

キーツは決して過去、現在、未来と連続して流れる永遠という抽象的概念を使って時間を把握することのできない詩人であった。時間の一刻一刻を、音もなくふりこぼれてゆく天使の涙の一つぶ一つぶにたとえることこそ、キーツの得意とするところであったのだ。キーツは具体的なイメージを重んじる詩人であり、ワー

ズワスのように山の高みから時間の象徴的な平原を一望することはできなかったのである。Prelude第10巻で、「時間も大自然も豊かに不滅の想いを目前にくりひろげてくれるだろう」と歌い、時間的視野の広さを裏書きしているワーズワスと違ってキーツは、次のように人生について語っている。

... and at the same time on all sides of it [Chamber of Maiden Thought] many doors are set open – but all dark – all leading to dark passages.

Letters of Keats, (3 May, 1818)

キーツにとっては、現在という瞬間のみが明るく照らされていたのである。「私は現在にのみ幸福を求めるのだ」⁽⁷⁾というキーツの手紙の文面は、まさしくこのことを言い換えているといえよう。

このようにみてくると、immortalityへと至る道は、両者の時間に対する考え方から決定的な影響を受けているということがいえるのである。ワーズワスはまず抽象的レベルで永遠を概念化し、その枠組にそって深く内省することによって immortality を認知したのであり、ワーズワスの詩作の努力の多くはもっぱらこの枠組を崩すまいとすることに向けられていた。一方キーツは時間を瞬間のレベルでしか捉えられなかったために、あくまで現在という瞬間にとどまりながら詩的陶酔によって肉体の死を超越し、immortality のビジョンに辿りついたといえよう。キーツは現在のエクスタティクな瞬間を永遠化しようとすることに全力を注いだのである。

以上のような両者の相違は彼らの詩風に大きな影響を及ぼしている。同じように鳥を描いてもワーズワスとキーツの間にはかなりの相違がみられるのである。キーツは “Ode to a Nightingale” でこう歌っている。

Now more than ever seems it rich to die,
To cease upon the midnight with no pain,
While thou art pouring forth thy soul abroad
In such an ecstasy.

“Ode to a Nightingale”, 11. 55-58.

ワーズワスは一方このように cuckoo を描いている。

O blithe New-comer! I have heard,

I hear thee and rejoice.

O Cuckoo! shall I call thee bird,

Or but a wandering Voice?

.....
The same whom in my school-boy days

I listen'd to; that Cry

Which made me look a thousand ways

In bush, and tree, and sky.

“To the Cuckoo”, 11. 1-4, 17-20.

先程も触れたように、キーツの詩においてはナイチンゲールの鳴き声はその瞬間の価値を異常に高め、キーツは肉体の死の恐怖から解放され、immortality を認識すると同時に、その瞬間を永遠化しようと願うのである。これに反し、後の詩におけるワーズワスのかっこうに対する態度はキーツとはまるで逆になっている。ワーズワスは何よりもまず永遠という時間の概念を保持しながらかっこうに相対するのだ。それ故にかっこうは単なる現実のかっこうではなく、少年時代に聞いたかっこうを思い起こさせてくれるために意味を持つのである。ワーズワスにおいては現在の事物はすべて過去あるいは未来に対して責任を負わなければならないし、逆に過去の“spots of time”は現在と未来との関係によって意味を持つといえよう。ワーズワスにとって、風景や事物は immortality を証明する手段に過ぎなかつたのである。それ故に“spots of time”と呼ばれている風景は決して美しくある必要はなかった。それはむしろ「実際変哲も無い風景であった」⁽⁸⁾極言すれば、自然の風景はワーズワスが時間の中を旅する際の milestone (道標) であればそれで足りたのである。ワーズワスが自然に対して抱いていた感情は、単に 18 世紀の picturesque 文学にみられるような風景の美しさに対するようなものではなく、あくまでも人生を生きていく上での拠所としての信頼感であった。すなわちある風景がワーズワスに与えた感動が、ワーズワスの持つ永遠の概念の中で果してくれる役割りに大きな関心があったのである。そ

れについてワーズワスはこう書いている。

Knowing that Nature never did betray
The heart that loved her; 'tis her privilege,
Through all the years of this our life, to lead
From joy to joy.

“Tintern Abbey”, 11. 125-128.

それ故に、かっこうの声を聞いても、虹に心が躍っても、ワーズワスは決してその美については触れてはいない。ワーズワスは虹やかっこうがひき起こしてくれる感動が、彼の *immortality* に対する確信を支えてくれることにもっぱら関心があったのである。その顕著な例はやはり “Immortality Ode” にもみられる。

To me the meanest flower that blows can give
Thoughts that do often lie too deep for tears.

“Immortality Ode”, 11. 206-207.

ワーズワスはこの “Ode” をこう結んでいるのであるが、涙に余る思いをいだかせた足元の花に対してもその花の形状はおろか名前さえ明らかにしてはいないのだ。ワーズワスの関心はやはり、目前の花が保証してくれる過去とあるいは未来との連続感にあったといえるであろう。

ところが同じ足元の花に対してキーツは次のように歌うのである。

I cannot see what flowers are at my feet,
Nor what soft incense hangs upon the boughs,
But, in embalmèd darkness, guess each sweet
Wherewith the seasonable month endows
The grass, the thicket, and the fruit-tree wild—
White hawthorn, and the pastoral eglantine;
Fast-fading voilets covered up in leaves;

“Ode to a Nightingale”, 11.41-47.

キーツがこれほど暗闇の中の花自体に関心を向けていることは、ワーズワスの場合と比べると注目に値すべきことといえよう。ワーズワスのように永遠についての確固とした枠組を持たなかったキーツは、あくまでも現在に固執し、それを永

遠化する他はなかった。そしてそれを可能にする最も確実な方法は「美」であった。「美」という非時間的で、見る者の心を奪い想像力を刺激するものは、現在という瞬間の永遠化を目指すキーツにとっては最高のものであったといえるだろう。キーツが *Endymion* の冒頭で“A thing of beauty is a joy forever.”といった時のキーツの意図は今検討してきたことを考慮するとよく理解しうるようと思われる。さらにいえば、キーツにとっては時間の存在を意識すること自体が *immortality* へ至る道程においての妨げであったといえよう。キーツにとっては過去はただひたすら過ぎ去ったものであり、何の意味ももたず悲しむべき対象であった。キーツは「眠り」にこう呼びかけている。

Then save me, or the passed day will shine
Upon my pillow, breeding many woes.
“To Sleep”, 11. 9-10.

おそらく若くして病んでいた弟の看病をすると同時に、自らも同じ病に倒れながら焦燥と失意の日々を過ごしていたキーツにとって、確かに過去は苦痛に過ぎないことは察するに余りあるのである。こうしてキーツは美を前面に押し出し、美に感覚的に近づいてゆくことによって *immortality* を獲得しようと願ったのである。

そのようなキーツの詩風にはワーズワスにはみられない気分が感じられるのは当然だろう。ワーズワスの詩の気分は一口でいえば、*soothing*なものである。それは山の高みに立ったワーズワスが常に過去、現在、未来をそのペースペクティブに納めながら、ある風景を眺めている所からくる余裕や自信に起因していると考えられる。ところがキーツの詩には決してそのような *soothing* な調子は現われてはこないのである。ひたすら美に没入し、それによって美の永遠化を目指したキーツではあったが、しかしそれは常に現実の時間の浸入に脅かされていたのだ。そして美の瞬間に守ろうとするキーツとそれを破壊しようとする現実の時間との間に生じる緊張感はキーツの詩の中において見事に生かされているように思われる。幾つかのキーツの詩に感じられるあの充実した豊かさは、それを突き崩そうとする現実の時間を前に、無心になり全神経を一点に集中している心の状

態を反映しているのである。おそらくキーツの最高の詩の部類に属する“Ode to Autumn”もやはりそのような豊かさに満ちている。

And sometimes like a gleaner thou dost keep
Steady thy laden head across a brook;
Or by a cider-press, with patient look,
Thou watchest the last oozings hours by hours.

Where are the songs of Spring? Ay, where are they?
Think not of them, thou hast thy music too, —
While barrèd clouds bloom the soft-dying day,
And touch the stubble-plains with rosy hue;
Then in a wailful choir the small gnats mourn
Among the river sallows, borne aloft
Or sinking as the light wind lives or dies;
And full-grown lambs loud bleat from hilly bourn;
Hedge-crickets sing; and now with treble soft
The red breast whistles from a garden-croft;
And gathering swallows twitter in the skies.

“Ode to Autumn”, 11. 19-33.

キーツの感覚はどこまでも秋を具体的にとらえ、その美に没入しようとしている。秋が最後のりんご汁のしたたりを何時間も何時間も見守っているという描写には、その零が落ちるたまゆらの時を永遠に引きのばそうとする意図が感じられるのである。ところが秋の豊かさの瞬間を永遠化し、そこに留ろうとするキーツの意志に反して時間の移りかわりがせまってくるのである。そよ風が吹きまた止むにつれ高く昇りまた沈む小さな蚊の群れは、その生命の短かさを嘆いているというのが通説になっているけれども、しかし同時にそれは刹那という時間の中で捉えられた秋の美がはやり永遠に続くものではなく、滅びてゆくことを暗示しているのではなかろうか。それを証するように、これを契機として風景が急速に遠ざかってゆくのである。“Ode to a Nightingale”においては“forlorn”という語をきっかけにしてナイチンゲールが遠ざかってゆき、キーツが現実にひき戻されたけれども、それと同様のことがここにもみられるのである。1817年11月22

日付の手紙の中で「雀が窓の前に来るならば雀といっしょになって砂利石をほじくる」とキーツが述べているように、秋の美に親しく触れ合い、その中に入り込んでゆくことこそキーツの本領であった。ところが、この詩の終りの部分で「丘」「菜園」「空」という風にキーツが遠景を描く時、キーツは単に距離的のみならず心理的にもこの秋の風景から遠ざかりつつあることを示しているのではなかろうかと思われる。

その点からすれば“Ode on a Grecian Urn”においては、キーツは安心してこの壺を眺めていられる。なぜならこの壺に描かれた風景や人物は、ただひたすら現在という瞬間に留まっているからである。キーツがこの詩の終わりに発した“Beauty is truth, truth beauty”という格言調の語句は、この背景があつたために可能になったと思われる。なぜなら、格言というのも又永遠の現在に留まっているからである。おそらくキーツはこの語句をこの壺の永遠性に対応するものとして作り出したのではないだろうか。このように永遠の現在形で自身の信条を吐露したキーツに対し、ワーズワスが己れの信条を語った言葉は次のようにあったことは、一層両者の差を感じさせずにはおかないのであろう。

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky:
So was it when my life began;
So is it now I am a man;
So be it when I shall grow old,
Or let me die!

“The Rainbow”, 11. 1-6. (イタリック筆者)

以上のように、ワーズワスとキーツの immortalityへの道を辿ってきたが、つまるところキーツの見出した道は、一つ一つの具体的な美のイメージの創造を積み重ねて immortalityをめざす帰納的と呼んでもよいものであったのに反し、ワーズワスがとった道は、まず永遠という確固たる visionを持った上で、己の visionを確認し、証明するために、風景を描くといういわば演繹的な方法であったということができるであろう。それは、肉体の死というものが、生きた宇宙の

永遠なる持続の中の一現象に過ぎないとみていた⁽⁹⁾ ワーズワスならではの思慮ではなかったろうか。それに対して、自ら墓碑銘を「その名水に書かれし者ここに眠る」と決めて死んでいったキーツは結局、ワーズワスのような宇宙觀を持ち得なかつたのであり、山の高みから永遠を望むワーズワスを“egotistical sublime”と呼んだことは、キーツのワーズワスに対する精一杯の皮肉であったように思われるるのである。

〔注〕

1. *O.E.D.*, “Immortality”, 1.
2. William Wordsworth, “Expostulation and Reply”, 1. 24.
3. *Letters of Keats*, (21 Dec., 1818).
4. Ernest De Selincourt (ed.), *The Poetical Works of William Wordsworth* (London, 1969), II, 384.
5. *Letters of Keats*, (27 Feb., 1818).
6. William Wordsworth, *Prelude*, Bk. XI, 1. 258.
7. *Letters of Keats*, (22 Nov., 1817).
8. William Wordsworth, *Prelude*, Bk. XI, 11. 308-309.
9. Karl Kroeber, *Romantic Landscape Vision* (Wisconsin, 1975), p. 13.

